

百五銀行のカードに記入し関係を断つ音が聞こえる

八月号・志水千登世

この先に何があるのだろうかやわらかい風に吹かれながら見るヤマザクラ

笹本 碧

父の骨をボーチの底へしまいたり見せてあげるよアメリカの空

倉石 理恵

良いことはきつと遅れてやつてくる 螢ひと粒闇を流れる

九月号・花 美月

窮極の引つ込み思案あぢさゐの額にかくれて見えぬ小花は

雪野 真菰

子供の日母の日父の日隠れんぼもうない人と遊ぶ海の日

北久保まりこ

選歌にあたり、昨年一〇月号から今年の九月号までを再度読んだ。この一年、あつという間の時間が過ぎて行つたが、その時間の反芻ができた。なんとも幸福な時間である。掲出できなかった歌にも素晴らしい歌がたくさんあつた。どの歌を選歌するか、ぎりぎりの選択をしてきたが、なるべく佐佐木幸綱先生や選者の方々の選歌と結果的には重複しないよう意識した。

それにしても、今年の選歌はつらいことが多かった。西岡徳江さん、笹本碧さん、雪野真菰さんのご逝去があつた。小紋潤さん、古川典子さんへの挽歌も多く、読むたびにお人柄と思ひ出が浮かび、それぞれの方々の歌いぶりがその都度思ひおこされた。歴史ある短歌結社でなければできない

伝承だと思ふ。心の花の世界で、これらの方々が永遠に生きて次の世代に語り掛けていたきたいと強く思つた。

現代歌壇では、仕事の歌、スポーツの歌、社会とかかわりの歌が少なくなつていが、心の花では、そんなに減少をしていないように思ふ。例えば、毎回、特色のある歌を提出されている佐藤博之、高橋秀、月丘ナイル、青山仁、児島直美、野口修二に注目していた。六人の歌は、職場や社会生活のジレンマについて具体を持って表現している。

今年度は無選歌欄への移行がなされた。作品評で取り上げた歌がたくさんあるが、移行された方々の歌と作者の紹介は、残念ながら一部の方を除いて割愛した。

今年の収獲三十首に掲出した作品の中で

も、特に、武藤義哉、加古陽、倉石理恵、大谷ゆかり、花美月、梅原ひろみ、志水千登世、岸並千珠子、奥村知世、桑野智章、北久保まりこ、服部崇、松本実穂、三輪良子、曲淵江里子各氏の作品は作者独自の風格と特色があり、敬意を持ちつつ、作品を鑑賞した。

とりあげる回数こそ少なかったが十亀弘史、坂口弘の毎回の作品にも注目した。特に、十亀の読書量には驚嘆するし、熾烈な環境を詩に仕立てている。

永田智子、山本陽子、海老原愛の歌を取り上げたかったが、あまり投稿されていない様子で、作品を読めなかったことは、残念である。一方、大変な環境にある鈴木勉は毎月丁寧な歌を提出されていて敬服した。

一年間、ありがとうございました。